

トゥルルルルル、トゥルルルルル……………。

「はい、警察です」

「もしもし、私、フェリシアでしゅ。5才でしゅ」

「フェリシアちゃん？ どうしたの？」

「んーと……知らないおじちゃんが家に来ました。で、フローラが、裸ん坊になって……それからあ……………」

「ええっ！ ちょっともつとゆっくり喋ってくれるかな。フローラって誰？」

「お姉ちゃんでしゅ。10才でしゅけど、アイスクリームが好きで、えっとお……………」

「それはいいの、フェリシア。何があったの？」

「んーと、ママもパパもおうちにいなくて、私とフローラでお留守番してて、知らないおじちゃんが来て、大変なことになって……………」

「最初からもう一度。君とお姉さんがお留守番してたんだよね。それで？」

「お姉ちゃんの部屋で大声がしたんで、いって見たら、知らないおじちゃんがいる、お姉ちゃんは裸ん坊でベッドにいて、それから……………」

「大変だ。すぐに出動させなきゃ。おうちはどこ？」

「えっとね、木がたくさんあって、バスが通ってて、ボボがいて……」
「ボボ？」

「お隣の犬のお名前だよ、とても可愛くて、毛がフサフサで、それから……」
「住所は分かるかな？ 通りの名前とか？」

「ピンカートン通りの22番地だと思いましゅ」

「わかった。おい、出勤だ。ピンカートン通りの22番地だ……。それで、何が起こったの？ お姉ちゃんはいま何してるの？」

「お部屋にいるよ。知らないおじちゃんも一緒」

「なんてこった。フェリシアちゃんは大丈夫？ すぐに家を出て、お巡りさんたちが来るまで、ドアのところで待っていなさい」

「ううん。私だいじょぶだよ」

「じゃあ、何が起こったか、もう一回訊くよ。フェリシアちゃんは、お姉ちゃんのお部屋に行っただよね。そしたら、お姉ちゃんは裸だったんだよ」

「うん。で、知らないおじちゃんが大声で言ったの」

「怒ってたの？」

「ううん。怪我してたの」

「怪我？」

「うん。『助けてくれ、助けてくれ、手を離してくれ』って何度も言ってたの。それから、泣いてたよ」

「泣いてた？ ええと、お姉ちゃんはそのとき、何してたのかな？」

「知らないおじちゃんがズボン脱いでてね、お姉ちゃんはおじちゃんのおちんちんの下のを握ってたよ。そんでえ、すぐに911番に電話しろって言うから、お電話かけたの」

「ちょっと待ってね。お姉ちゃんはいまどこにいるの？」

「お部屋だよ。あ、まだ泣いてる……」

「泣いてるって、誰が？」

「知らないおじちゃん」

「お姉ちゃんは、知らないおじちゃんとまだお部屋にいるんだね？」

「うん。いるよ。お巡りさんが来るまでは、絶対に手を離さないって言ってる」

「知らないおじちゃんはどうしてる？」

「ずーっと、泣いててえ、離して、離してって泣いててえ……。あ、今ね、潰れちゃうから、やめてって言った」

「え、え、え!？」

「あ、殺されるって言った。あ、ぎゃーーって言った。……。あ、お姉ちゃんがお部屋から出てきた。え、なに、お姉ちゃん？ 潰したって何を？ え、タマ……?」

「……………」

「あ、チャイムが鳴ってるよ。お姉ちゃん、出て」

「……お巡りさんが来たのかな？」

「うん。お姉ちゃんがドアを開けて、お巡りさんがいっぱい入ってきたよ」

「わかった。フェリシア、いい子だね。よく教えてくれたね。女のお巡りさんがいるでしょ？」

「うん。いるよ」

「その人に電話をかわってくれるかな」

「うん。いいよ」

「ああ、いい子だ。元気だね。ありがとう」

「うん、バイバイ」

「もしもし、メイプルです。いま到着。現場は確認したわ」

「メイプル巡査、現場の報告を」

「報告しても、たぶん、信じないと思うわよ」

「いま君はこう考えてるんだろ。自分が女性でよかったって」

「そのとおりよ。ロジャー」